

報告番号 甲 乙 第 号

富永真樹君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：泉鏡花・物語ることへの意志——図像と信仰を視座として——

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部国文専攻教授 同大学院文学研究科委員	小平麻衣子
副査	慶應義塾大学名誉教授	松村友視
副査	大阪大学招聘研究員	杲由美

本研究の概要

明治期以降にリアリズムを基盤として成立した近代小説は、物語や説話・伝承、信仰、それに伴う図像を排除してきたと言えるが、本論文の基本的な問題意識と手法は、泉鏡花がそれらを近代小説として意識的に再構成したとする見地から、個別のテキストに即して具体的な典拠を求め、それを結び合わせる鏡花の論理を明らかにするものである。論文は第三部からなり、以下のように構成されている。

序

第一部 同時代宗教へのまなざし

第一章 「思想惑乱の時代」における〈現実〉へのまなざし ——「瓔珞品」論——

- 一、同時代宗教問題
- 二、救いのかたち
- 三、「宗教」と信仰
- 四、〈現実〉への応答

第二章 〈聖〉と〈魔〉のダイナミズム ——「風流線」「続風流線」論——

- 一、偽〈聖〉という〈悪〉
- 二、「外道」と同時代状況

- 三、〈聖〉から〈魔〉へ
- 四、〈魔〉から〈聖〉へ
- 五、「夜」から描かれる絵物語

第二部 図像と信仰

第一章 偶像に宿る信仰 —— 「春昼」「春昼後刻」論 ——

- 一、多義性のもつ意味
- 二、同時代宗教意識との関わり
- 三、偶像と信仰
- 四、〈非・現実〉という想像力

第二章 非在を描く試み —— 「夫人利生記」論 ——

- 一、樹島の欲望
- 二、『釈迦八相倭文庫』への回路
- 三、図像の反復、共有
- 四、非在の先にあるもの
- 五、祈りと応答

第三章 〈物語〉が問うもの —— 「山海評判記」論 ——

- 一、〈オシラ神〉のモチーフ
- 二、〈産〉のモチーフ
- 三、二つの〈物語〉
- 四、雪岱挿絵という〈物語〉
- 五、〈物語〉からの問いと応答

第三部 〈物語〉と図像

第一章 書物という世界 —— 『日本橋』論 ——

- 一、雪岱による『日本橋』装幀
- 二、重なる女たち
- 三、雪岱が描く「魂」 —— 『日本橋』見返し
- 四、雪岱が描く「魂」 —— 『日本橋』函・表紙
- 五、書物としての意味

第二章 〈物語〉を体現することの試み —— 「国貞ゑがく」論 ——

- 一、消えゆく世界へのまなざし
- 二、「国貞ゑがく」錦絵
- 三、失われつつあるものを結ぶ世界
- 四、「国貞ゑがく」が体現するもの

第三章 「小説家」の終わりからはじまりへ —— 「薄紅梅」論 ——

- 一、回想記としての「薄紅梅」
- 二、糸七—語り手—鏡花

三、滝夜叉姫としてのお京

四、「薄紅梅」に書かれる「小説」のかたち

五、小説家・泉鏡花

主要参考文献一覧

論文の要旨

泉鏡花は一般に、同時代に対して超然たる位置に立ち、独自の美と幻想の世界を築き上げたとされる一方、その文学観は近代思想とは無縁な前近代性を留めると見なされてきた。このような固定化した鏡花像に対して新たな評価軸を示すところに本論文の基本的な主軸は据えられている。

第一部では、第一章の「瓔珞品」(明治38年)、第二章の「風流線」(明治36~37年)の二作品を対象に同時代宗教意識との関わりが分析される。「瓔珞品」は、後藤宙外が「思想惑乱の時代」と呼んだ混乱と青年層の新たな宗教への渴望を背景とし、仏教とキリスト教という特定の宗教の対立をとりあげながら、道教的なイメージをもつ山の神や地方の民俗信仰といった、近代的な「宗教」から排除された古来の「聖性」の練り直しの中に、これらの対立が包摂・止揚される構図を明らかにする。「風流線」では、「水滸伝」的な伝奇性ゆえに善悪二元論的に読まれてきた先行研究とは異なり、藤村操の投身自殺や、ニーチェ思想の流行、井上円了をはじめとする印度哲学など同時代の思想・宗教問題との関わりに現実性を指摘した上で、作中で「活如来」と崇められる土地の慈善家の偽善を暴き、対峙する鉄道工夫集団や女性主人公に、「魔」や「外道」から「聖性」に至り着く論理を見出している。その手順として、白山信仰をめぐる地理的・イメージ的連関を論証している。

第二部では、鏡花文学における〈信仰〉と〈図像〉との関係を論じている。第一章「春昼」「春昼後刻」(明治39年)では、具体的な交流は持たない人物同士の関係や、△□○などの記号が使用される象徴的な内容に対し、同時代に偶像崇拜が否定され、仏像が美術品とみなされるなど宗教意識が変容した状況を重ね、主人公において恋愛における身体的欲求と〈信仰〉における偶像への思いが、渴仰する精神の問題として結び合わされていることを指摘している。さらに幻想性についても、現実において周縁化しつつある祈りや信仰を掬い上げ、救済の可能性を示すものとして捉えなおしている。

次いで第二章では、「夫人利生記」(大正13年)を対象に、摩耶夫人信仰をめぐり、重層的に現れる仏像、写真、押絵、人形などさまざまな図像について出典を調査している。従来の研究では、亡母への思慕から釈迦の実母・摩耶夫人の仏像を注文するために仏師の許を訪れながら、その途次に出会った仏師の妻の容色に惹かれ、彼女の似姿を像に刻むことを要求する主人公の欲望が、最終的に断罪される作品として解釈されてきた。これに対して本論文では、主人公の欲望が、亡母への思慕、摩耶夫人への信仰、幼年期の記憶などさまざまな情動と複合していることを具体的に指摘した上で、最終的には摩耶夫人自身の姿が直接描か

れないことに着目する。仏像の起源譚である「優填王造像伝説」や万亭応賀の合巻『釈迦八相倭文庫』（弘化2年～明治4年）をふまえると、信仰と、個人的な母恋いや恋愛を貫く「非在」の構図が明らかになり、主人公の欲望は断罪されるよりはむしろ、人々の祈りが根底において欲望と聖性の双方に結びつくことこそ信仰の根源的エネルギーであることを示し、これらの複合的な関係を描くことを通してひとつの信仰の世界に到達しようとしたものとして位置付けられる。

第三章で扱う長編「山海評判記」（昭和4年）においては、〈物語〉と信仰と図像の関係を、主に三つの基軸に沿って分析する。その第一は、主人公である矢野の小説家としての表現意識を、鏡花自身との重層を視野に論ずる基軸、第二は、矢野と対峙する姫沼綾羽ら一党の背後にある信仰形態をめぐる基軸、第三は、初出紙『時事新報』連載に際して毎回掲げられた小村雪岱による挿絵との応答関係をめぐる基軸である。そして、東北のオシラ神信仰が白山信仰に起源を持つという本作品で取られた宗教的解釈は、主に綾羽によって展開される視覚的なシーケンスと相俟って、主人公矢野が書くところの近代的小説観を相対化するものとする。それはまた矢野自身にとっても、自らの表現史を振り返り、至り着くべき到達点として象徴される白山への志向を問い直す契機でもあることを、錯綜した作品構造の中から明晰に析出する。小村雪岱については、先行する画像との対応関係をも視野に入れつつ挿絵を詳細に分析し、それらが登場人物の錯視や幻想、譬喩表現といった「非在」の世界を中心に描いており、作品の視覚的世界観を補強するものとなりえていることを指摘する。

第三部は、〈物語〉と〈図像〉との関係を中心に論じている。第一章で扱う『日本橋』（大正3年）は、書き下ろしの単行本として、鏡花の依頼に応じた小村雪岱による斬新な装幀を伴って刊行され、出版史上において画期的な位置を占める。本章では、鏡花による小説本文と雪岱による装幀との関係を解析し、それらが一冊の書物としての世界を分かちがたく構成していることを実証している。作中の芸者たちが、それぞれの薄幸の運命を幾重にも重ね合わせ、しかも重なり合うことによって、運命を受け入れつつもなお情と意志を貫いていることを分析した上で、特に雪岱が日本橋の四季を描いた見返し画について、特定の場面を描かずに、作品の読解によって明らかになる女性たちの重層性自体を描いていることを、特定のモチーフの分析によって立証している。また、日本橋の並蔵を様式的に描き出した表紙についても、蝶のモチーフが追加されていることを取り上げ、それまでの浮世絵などの日本橋の表象とも、橋口五葉など洋画による装幀とも異なる世界の提示を意味づけている。

第二章「国貞ゑがく」（明治43年）論は、〈物語〉と図像との関係を歴史的時間との関わりの中で問い直した論考である。主人公は、幼少期に貧しさゆえに歌川国貞の美人錦絵を手放すが、それを取り戻そうとする現在の主人公の行動は、錦絵に纏わる亡き母の面影だけでなく、海外の価値観による錦絵の値の高騰、錦絵にまつわる見世物小屋などの風俗の消失など、失われたものへの思慕が重なっており、その目指す国境の地が、魔性と聖性とを併せもつ両義的な場であることを、山東京伝の読本『善知安方忠義伝』（文化3年）の滝夜叉姫の形象などを通して分析している。

最終章で扱う「薄紅梅」(昭和12年)は、明治中期の鏡花自身の小説家としての出発期から現在に至る足跡であり、語り手は鏡花自身を彷彿させ、また新聞連載時の鏑木清方による挿絵にも、作者を思わせる人物が描かれている。この語り手と作中人物との関係、また語り手による挿絵画家への言及などから、小説という虚構の形式自体への鏡花の姿勢が織り込まれているとする。それは読者によって新たな物語が生み出されていく〈物語〉という形式を、近代的な小説において自覚的に実践することであると指摘する。「三国志演義」「水滸伝」「源氏物語」、前章「国貞丞がく」でも引用された読本『善知安方忠義伝』中の滝夜叉姫の形象など、先行する物語世界をさまざまに織り込んでいくことへの目配りもある。

最終的に、〈物語〉と〈信仰〉と〈図像〉の連関が、近代小説において〈物語〉を語ることを志向する鏡花の意志的な試みであることを総括している。

審査の要旨

泉鏡花は、近代の文芸思潮から距離を保ち、独自の言語感覚によって幻想的な美の世界を構築したとされ、特に抑圧された女性を主人公にして社会的な制度への批判を含んでいることが評価されてきたが、それはしばしば近代性に対立するものとして〈前近代〉という評語を与えられてもきた。このような固定化した鏡花像に対して新たな評価軸を示すところに本論文の基本的な姿勢がある。その論証の中心は、鏡花が意識的に〈物語〉という表現形式を近代小説として構築したこと、その実践に宗教意識や図像表現が分かちがたく結びついていることである。その結びつきを、徹底した同時代言説の調査や、プレテクストの発見、綿密な図像解読に基づいて示しえたことが本論文の第一の成果といえる。

西洋近代の文学観の導入による「近代小説」概念の成立は、社会や文化に対する批評性とともに、題材の日常化や、顕在を厭う語り手の創設などを目印とし、伝奇的なプロットや、口承文芸に由来する語りなどを含む旧来の文芸世界を駆逐することを意味していた。こうした近代的概念による分節は、文学以外の様々な分野でも起こっていたことは言うまでもないが、富永君は、それが顕著に表れる宗教意識や図像表現に注目する。近代的な宗教概念の導入は、さまざまなレベルを混在させていた信仰の様態に対し、体系化された「宗教」を特権化する一方、「民間信仰」や「迷信」をその下位に分節する。図像表現においては、たとえば民衆に広く受容された浮世絵が、西洋的芸術観の導入を機に「美術」として再評価されるが、それは価格も高騰させ、投機的な対象へと変化させる。さらに、信仰の対象であった仏像や宗教画も「宗教美術」と見なされ、宗教と図像との密接不可分の関係も変容を余儀なくされる。富永君は、こうした背景において失われつつあるものを鏡花が文学において再び統合する行為に〈物語〉という用語を与えている。富永君による〈物語〉とは、伝奇的なプロット、口承文芸などにみられる語りの形態、挿絵画家や読者の解釈行為によって再創造される意味やイメージの体系などを総合的に指すものである。それらを総合する行為を〈物語〉として捉えることで、従来は前近代性の残滓として鏡花の資質に還元されてきた要素を、

近代小説に対する鏡花の意識的な方法的試みとして位置付けている点に独自性があり、同時に、それらが幻想的ではあるものの、当時の社会構造の変化に伴う同時代的な問題に即したものであることを示した点は示唆に富む。

宗教については、精神性の高さゆえに日常とは切り離されがちな営みを、一貫して同時代の人間の〈現実〉として扱う点に特徴があり、第一部では、「瓔珞品」におけるキリスト教や仏教などの対立の止揚や、「風流線」における〈悪〉〈魔〉と〈聖〉が重層した世界観を論じるにあたり、華嚴の滝に投身自殺した藤村操を代表とする「煩悶青年」を生んだ明治中期の思想状況、とりわけニーチェ思想の流行や、井上円了『外道哲学』（明治30年）を始めとする印度哲学の興隆との関連を示唆したことは斬新である。第二部では、綱島梁川「予が見神の実験」（明治38年）などを通じ、宗教が個人主義化し、「人格」に関連づけられることで迷信を脱し、近代的な理解を得ていく同時代の傾向を丹念に追った上で、「春昼」「春昼後刻」また「夫人利生記」といった作品に描かれる偶像が、近代的宗教の精神化によって切り捨てられた身体や、親密な人の身体の不在にまつわる祈りを救いあげるものとして位置づけられるが、〈現実〉とのかかわりにより、その救いが作中人物にとってだけでなく、読者にまで及ぶことが示唆されている。一見荒唐無稽なプロットは、近代的宗教概念からは下位に位置づけられる信仰形態を通じて、混沌たる思想状況からの救済を見出すための隘路であるとする理解は、鏡花独自の宗教観を背景とする同時代への視線のありかとその方向性を具体的に示す鮮明な評価軸といってよい。

図像については、第二部、第三部にまたがって、語りによって喚起される視覚イメージと、挿絵の両面から論じられている。作中の視覚イメージについては、第二部第二章の「夫人利生記」論において、摩耶夫人像にまつわる万亭応賀の合巻『釈迦八相倭文庫』のイメージ、第三部第二章「国貞ゑがく」論では、山東京伝の読本『善知安方忠義伝』などの取り込みとずらしによって、意図的な多義性が実現されていることを跡づけている。また地図や俯瞰図を媒介として視覚的イメージと関連する地理的想像力については、先立つ第一部第二章でも、鏡花文学にとって重要な意味を持つ白山周辺が扱われていたが、第二部第三章「山海評判記」論では、さらに展開される。すなわち、東北に伝わるオシラ神信仰が加賀の白山信仰を起源とするという構図が、プロットと挿絵の協働によって構築されていることを、複数のモチーフの符合などを丹念に追うことで検証している。既に民俗学では取られなくなっていた説をあえて描出することが、〈物語〉と〈信仰〉と〈図像〉の三者を包括する視野から近代的文学観に対する根本的な問い直しとしてとらえなおされており、本章は「山海評判記」論として質量ともに先行研究を圧倒するだけでなく、本学位請求論文の中心的な位置を担うといつてよい。挿絵については、同第二部第三章「山海評判記」論、第三部第一章『日本橋』論における小村雪岱、第三部第三章「薄紅梅」論における鍋木清方の分析が主要部分である。いずれの画家も、装幀や挿絵で小説の特定の場面を描出するとは限らないが、鏡花との個人的なかかわりから言っても、本文を十分に読み込んだ上での作画であり、その画風は象徴的であるゆえに、画家が小説をどのように再解釈したかを確定するのは、文学と図像の

双方に渡る綿密な分析が必要である。本論文では、画中のモチーフや、「三十六歌仙絵巻」や合巻『修紫田舎源氏』（文化12年～天保13年）など先行する図像との関連だけでなく、題字カットの意匠や新聞挿絵の大小や配置、またあえて描かれないものまで丹念に追うことで、文字テキストと画によって織りなされる想像的世界の総合的分析として、高い水準を示している。

以上のように、本学位請求論文は、同時代の思想状況に対する鏡花の意識的な関与のありようを具体的に検証し、〈信仰〉や〈図像〉との不可分の関係を視野に、近代小説としての表現形式においてあえて〈物語〉ことへの意志を示したことの意味を際やかに浮き彫りにしている点で高い評価に値する。また、各章個々の作品分析が、独創的な切り口と精細なテキスト分析によって、従来の作品論の地平を超え出る達成を一貫して示している点も、今後の鏡花研究に資する重要な成果と位置づけられる。

一方、その中心主題に関わって、いくつかの問題点も指摘される。鏡花文学が近代的な文学場において〈物語〉的表現の意味に自覚的であったことは本論文が鮮明に示すところであり、すでに述べたように、本論文では多領域にわたる近代小説批判を、〈物語〉という用語で一括することにより、複雑な鏡花文学について一貫した見取り図を提示し得ているが、それだけに、論述の鍵となる〈物語〉の概念規定には慎重な厳密さが求められる。本論文は、近代小説概念成立以前の文芸、またはその享受をめぐる諸様態を〈物語〉と規定しているが、論述の過程では、たとえば「春昼」や『日本橋』を論じる際に、個々の作中人物をめぐるシーケンスや、女性の運命について〈物語〉と呼ぶケースがあり、また作中人物が語る世界や想像する世界など、虚構や幻想的な位相を〈物語〉と呼ぶ例も認められ、揺れが生じている。これらが〈物語〉の多義性の一端につながることは確かであり、各章ごとの整合性は確保されているとしても、鏡花文学における〈物語〉的表現のもつ意味を説得的に論証するためにこそ、より厳密な概念規定と総合的な意義づけが求められよう。また、鏡花という作家自身の戦略性をどこまで読みこめるのかについても、一層の検討ができないわけではない。例えば、読者が古典の詞章から喚起させられるイメージの取り込みについては、読者と同時期の文化を共有する鏡花による戦略として位置付けることは可能だが、挿絵によって付加される効果は、挿絵画家の積極的な関与によるものであり、鏡花の意志に限定せずに〈物語〉の概念規定をすることは可能である。そのため、〈物語〉という用語を採用する意義を、泉鏡花研究の範囲に限定せず、作家やテキストや読書行為に絡む文学研究の方法論との関わりで説明する余地もあると考える。

上記のような問題は残るとはいえ、それは本論文に触発されて導き出される発展的課題であり、文学テキストを論じる枠組みの再考につながる大きな問題でもあるため、博士論文の範疇を超えるとも言える。本論文が、時代状況をめぐる俯瞰的な視野の中に鏡花を位置づけ、近代文学史に鏡花を定位すべき新たな座標軸を拓いたことの研究史的な意味はきわめて大きい。そのことは、ひとり鏡花文学への問い直しとしてだけでなく、近代的な文学観・文学史観、ひいては近代的認識それ自体への根本的な問いたり得てもいる。むしろその意味

においてこそ、泉鏡花の文学世界の問い直しとしての本質的な意味を本論文は担っている
というべきだろう。

以上の観点から、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位の授与にふさわしいもの
と判断するものである。

以上